

ヒューマンな文字

カタカナコトバ

男の厚化粧

マジンガーZ

大いなる旅

六月 二日号

六月 九日号

六月 一六日号

六月 二三日号

六月 三〇日号

III ことばの背後にあるもの

意味とひびき

『展望』一九六四年一〇月号

〈ほんやく文化〉の悲惨と栄光

〃 一九六七年一二月号

解 説

中野孝次

わたしがセヴィーリヤに永川玲二を訪ねにいつて以来、早いもので今年で二十年になる。当時五十歳だったわたしは古稀という年齢になり、もはや外国へ行く元気もない。永川はわたしより二つ歳下だが似たり寄つたりの年齢、ということとは二人とも既に完全にジジイの仲間入りをしているということである。が、その老年の迎え方が永川とわたしとはまるでちがうようだ。

わたしのほうはたえず死を思い、「吾生^{わがせい}、既に蹉跎^{さだ}たり、諸縁^{しよゑん}を放下^{はうげ}すべき時なり」と『徒然草』の一節を口ずさんでは、冠婚葬祭からパーティその他すべて遠慮して隠者のような暮らしをしているのに対し、永川は依然としてセヴィーリヤに腰を据えて日本に帰ろうなんて気配も見せない。向うでの暮しぶりもわたしとまるで正反対で、その家には相も変わらず大勢の若者が押しかけ、いろんな国の言葉がとびかう中でカンカンガクガクの議論を交わし、永川はいわば

その昔風にいうならヒッピー連中の親分のような役割を果たしているらしいのである。老いということをまるで意識していないかのようだ。

これは日本人としてはずいぶんと珍しい例ではあるまいか。

日本人は（こういう一般的な言い方をわたしは好まないが）ドイツ人と同じように帰属意識が強く、会社とか大学とか官庁とかそういう大きな組織体に所属していないと安心できないふうである。どこにも所属していない人間は風来坊であり、疑わしい目で見られ、信用されない。そういう窮屈な空気がいやで永川は日本をとび出したに違いないが、しかしそれから外国で何一つ自分の保証もなく、どこにも所属せず、従って世間から見れば何者でもない宙ぶらりんの状態で、ただの一個の人間としてのみ生きつづけるというのは、これは並大抵の覚悟で出来ることではない。よくよく考えた末の、しっかりと思想的信条がなければ貫き通せるものではなからう。

その永川の思想的背景をよく示しているのが、この「ことばの政治学」である。

ベルギーでのフランス語とオランダ語の対立関係から語り始め、スペインの少数民族語バスク語に移り、そういうところから「言語帝国主義」の意味するところを探つてゆく。若者たちとの会話を通して、ごくふつうの言葉でカントリーとネイションの違い、「おくに自慢」という場合のクニと、「お国の為に」のクニの関係へと問題をひろげてゆく手ざわは、実に鮮やか

でみごとなものだが、これはつまりこの問題が永川やその周辺の若者にとつては最も切実な、また日常的な、たえず論じられているものであるからであろう。

国家（ネイション）の枠組によってではなく郷土（住むところ）をもととして人間や社会やあらゆる物事を考え、地球上のすべての人間の共存と友愛の可能性をさぐる、これこそ彼らのたえざるディスカッションの主題にほかならない。

永川がヨーロッパに出かけていったのはちやうど、世界中の若者が自由と友愛を求めてクニから外にさまよい歩き出した「ヒッピー」の時代であった。彼らは永川よりずっと下の世代であったが、永川には氣質的にも（彼も放浪的傾向を強く持つ）思想的にもこの連中と話が合ったのだろう。永川の博識と、友愛の気分と、強い好奇心と、会話を通じて議論を展開し導いていく能力とは、まもなく自然な形で彼を彼らの親分的な立場に置き、セヴィーリヤの彼の家はヨーロッパにおけるヒッピーたちの一つを中心になっていったのではないか、とわたしは想像している。

わたしが訪ねていったときも彼の家にはいろんな国の若者がいて、食事ときにはワインをのみながらいろんな国の言葉でワイワイガヤガヤ勝手な論議を展開していたのであった。閉鎖的なムラ社会になりがちな日本とは正反対の、万人に開かれた友愛的気分がそこにはあった。永川はその中であつてニコニコと機嫌よく、あるときは英語で、あるときはスペイン語で、また

日本語で、彼らと話し、問題を論じあっている。

わたしはそれを見たとき、もしかすると彼は日本人として一つの新しいタイプの生き方を創り出しつつあるのではないか、とさえ思った。長いあいだ外国に行つたまま帰国なぞ考えないことといい、その外国で孤独どころが大勢の若者の信頼しうる兄貴のような役割を演じていることといい（しかもそれはいかなる利害関係もともなわぬ自由な、思想によるつながりだ）、一個の自由人の新しい生き方がここにあるのではないか。日本の友人たちのあいだでは、永川は仕事もしないでスペインで若者と遊んでばかりいると非難する声のみ高いが、もしかするとこれこそ、ちょうどソクラテスが著書も作らず若者相手にデイスカッションばかりしていたように、一つの創造行為なのかもしれない、とさえわたしは思ったものであった。

そういう彼の生き方の気分と、考え方の性^まとが、この「ことばの政治学」からよく感じとれるだろうと思う。

古い昔からの友達としてわたしは本当は彼にこういつた型破りのエッセイを次から次へと書いて貰いたいのだが、またかねがねうるさくそう言っているのだが、なかなかそうもならず、だから、こうして古い彼の著書が新しく出版されることはわたしとしては欣快これに過ぐるものなしなのである。せめてこの復刊によって永川玲二の思想をもう一度今を生きる若者に知つて貰えたらとわたしは願つていて、当時よりはるかに閉鎖的に不自由になつたかのような今の

日本で、こういうとらわれぬ自由な考え方に接することは、若い人にとつてはとくに有意義であらうと思つている。

昨年永川は用事で久しぶりに日本に来て（帰つてという感じではない）、その来日を機会に彼を囲む会が催された。わたしたち夫婦も（妻は妻でスペイン旅行中永川の家を訪ね世話になつている）その席に出たが、集まつた人のほとんどはわたしの知らぬ若者たちで、それもいろんな職業に及び、いまさらながら永川玲二のセヴィリヤにおける幅広い交遊圏を再認識させられたのであった。日本人だけでこうなのだから、これに各国の人間を加えたら大変な交遊圏がそこにあることがわかる。

永川は仕事をしようとしなのではないらしい。イスラム文化の西漸の歴史に関心を抱き、何十年もかけてその文献を収集しているという。今やそれは膨大な量に上るらしいが、やがてそれをもとに長大な歴史小説を書きたいといつか洩らしたことがある。わたしはむしろその完成を誰よりも望んでいるが、いつ完成するかしれないそんな大作ではなく、短くとも彼の生き方、考え方、感じ方、行動の仕方を伝えているこの「ことばの政治学」が目下のところは彼の代表作というしかないのである。

一九五〇年代、まだ二人とも二十代から三十代初めだったころ、わたしと永川はスキーや登山や、詩人の安東次男や死んだ仏文学者橋本一明たちとの麻雀や囲碁やで三日にあげず会い、

せつせと実によく遊んだものであった。そういう時期は永川が外国へ行ってしまふとともに終つたが、爾来何十年か、二人とも古い、人生の決算を求められる時期に達している。若い時は生きる気分でも考え方でも非常に共通するものが多かったのに、いま自分が七十という年齢に達してみると、永川玲二とわたしとはその後の生の軌跡がなんと異なっていたかに驚かされるのである。

わたしは永川が去つた頃からもつぱら思いを日本の古典にひそめ、日本の古い文化とばかり付き合つて来たけれども、永川はそんなふう閉じられるのを望まず、外国にあつてつねに流動する「今ココニ」の時を生きて来た。彼のように生涯を外国に置いて平然と生きることは、わたしには到底不可能だ。その意味でもこの「ことばの政治学」は、わたしとまったく違う生き方を貫いてみせた人間の尊重すべき証言なのである。

国際化などということがしきりに言われ、日本人が国内の特殊な状況に閉じこもつていないで世界に向つて自己を開くことが求められているようだが、そのことがいくら言われても空しい掛け声にしかひびかないのは、そこに具体的な実践例が欠けているからである。真に国際化された人間とはこういうものだ、しかしわたしなら永川玲二の場合を事例としてさし出してみたい。いかなる留保もなくわたしはそうすることが出来る。国際化とはたんに外国語が出来るとか何とかの問題でなく、友愛を以てどんな人間（言語・民族・宗教のちがいをもちつ

間）とも共存してゆくすべを探る人間であることを、永川玲二は身を以て証明してみせている。大が小を、多数が少数を、支配するのではない。小も少数者もそのまま大と多の中に共存しうる世界こそが、これからの地球を救う唯一の可能性だと言っている。

永川は鳥取県の生れだが、日本海側の雪に閉ざされた地方からこういう自由で開かれた精神が生れたことは二十世紀日本の一つの奇蹟だ、とさえ言いたい気がわたしはするくらいである。永川のヒゲ面を見ると気恥しくてとてもそんな言葉はオクビにも出せず、会えば昔ながらの悪口しか浮んで来ないのだが。

一九九五年一月一三日